

第15次ヤッスホユック発掘調査（2024年）

第15次ヤッスホユック発掘調査は、遺丘頂上部の発掘区 Area 1 で、2024年9月6日から11月8日までの約10週間に亘り実施されました。今年度は、発掘区を覆う保護屋根の東半分を外し、発掘区のクリーニングをおこなったうえで、発掘作業を開始しました。



Fig. 1 ヤッスホユック全景

1. 2024年度ヤッスホユック発掘調査の目的と発掘区域

ヤッスホユックの発掘調査は、前期青銅器時代から鉄器時代に至る都市遺構を発掘し、特に前期青銅器時代の編年を明らかにするとともに、前期青銅器時代

から中期青銅器時代への変化を捉え、紀元前3千年紀から2千年紀における都市国家の発展が如何なるものであったかを詳らかにすることを目的としています。この目的に向けて、2022年以來、遺丘の頂上部(Area1)で前期青銅器時代より古い層への掘り下げを進め、第III層(前期青銅器時代)ないにおける編年をより詳細に検証することに重きを置いています。

2024年度も、王宮址と思われる大建築遺構(第1建築層 III-1)が検出された第1の大火災層と、その下方に E9/d1, E8/g1p0, E9/g1, E9/f1 グリッドで部分的に確認されている第2の火災層に至る複数の建築遺構について調査を進めました。

2024年度の発掘調査は、Area1の北東部にある E8/f10, E8/g10, E9/e1, E9/f1, E9/g1 の5グリッドを中心に進められました。

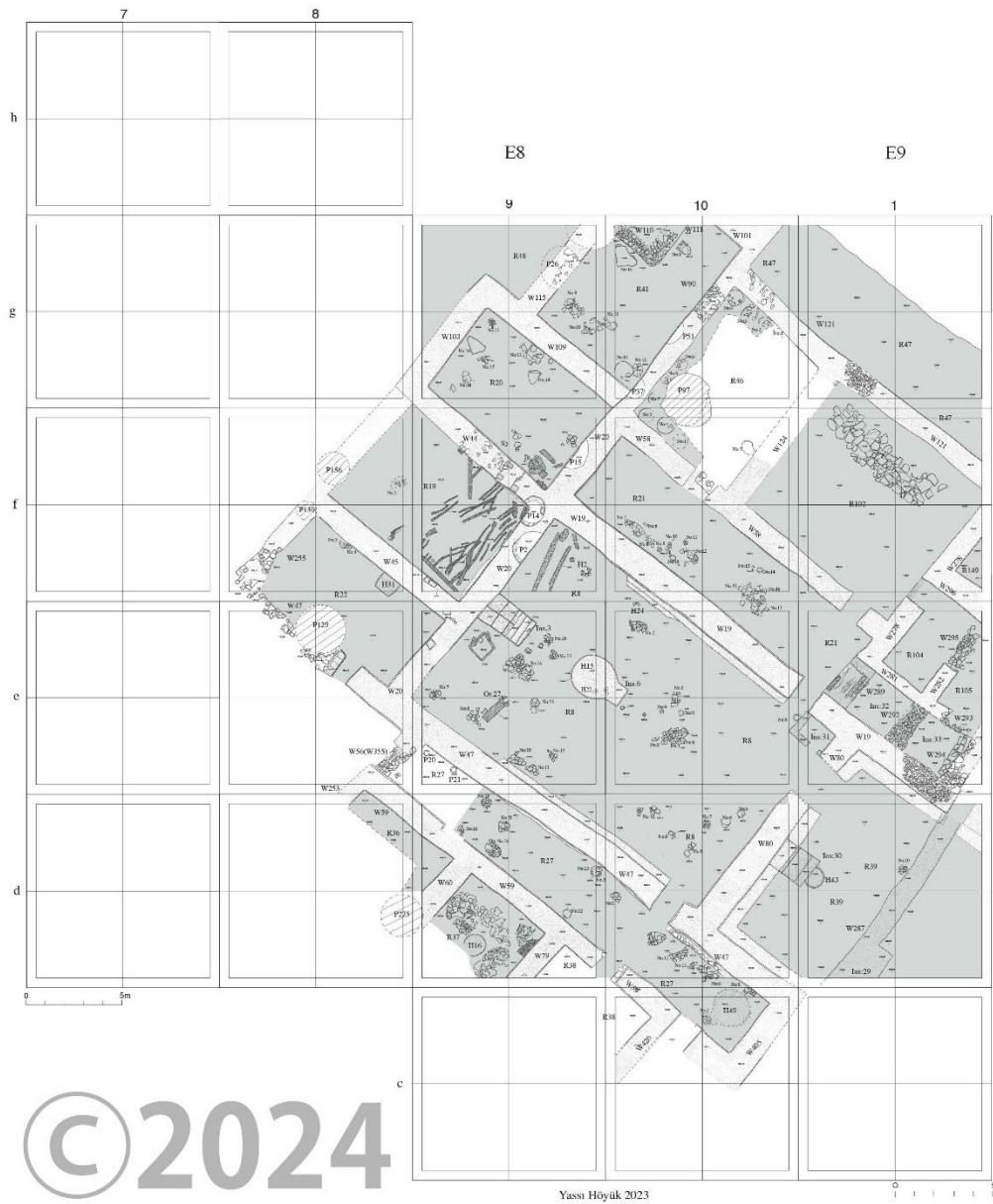


Fig. 2 前期青銅器時代の王宮址 (III-1 建築層) 実測図

2. 発掘調査

2.1. 第1建築層(III-1、第1火災層)：王宮址に属する壁の取り外し

ヤッスホユック第III層ではこれまでに前期青銅器時代に属する二つの火災層が検出されてきました。上方の第1の火災層で検出された王宮もしくは公共建築と見られる大規模な建築遺構は、第1建築層に位置付けられ、その遺構群は2009-2016年にほぼ発掘されています。この王宮址に属する部屋のうち、E9/d1グリッドのR39(W387)は2022年度に、E8/g10-E8/f10-E9/g1-E9/f1で検出されたR102およびR46の床面および北壁W121は2023年度に取り外され、この区域でより下方の第2の火災層へ掘り下げが進められました。2024年度は、E8/g10グリッドで残存していたW121の一部、E8/f10-E9/f1-E8/e10-E9/e1グリッドでR21(W58, W19)、E9/f1グリッドでR149(W278, W296)、E9/e1グリッドでR104-R105(W278, W281, W282)の取り外しを行いました。

W121：R46とR47間の壁W121のE9/f1-E9/g1グリッドに位置する部分は2023年度に既に取り外されており、2024年度にはE8/g10グリッドに残されていたW121の一部の取り外しが為されました。W121を取り外す際に確認され

た壁の建築工法は昨年度の報告にもありますが、以下の通りです。この III-1 層で取り外されたいずれの壁も、ほぼ同様の工法で築かれていました。

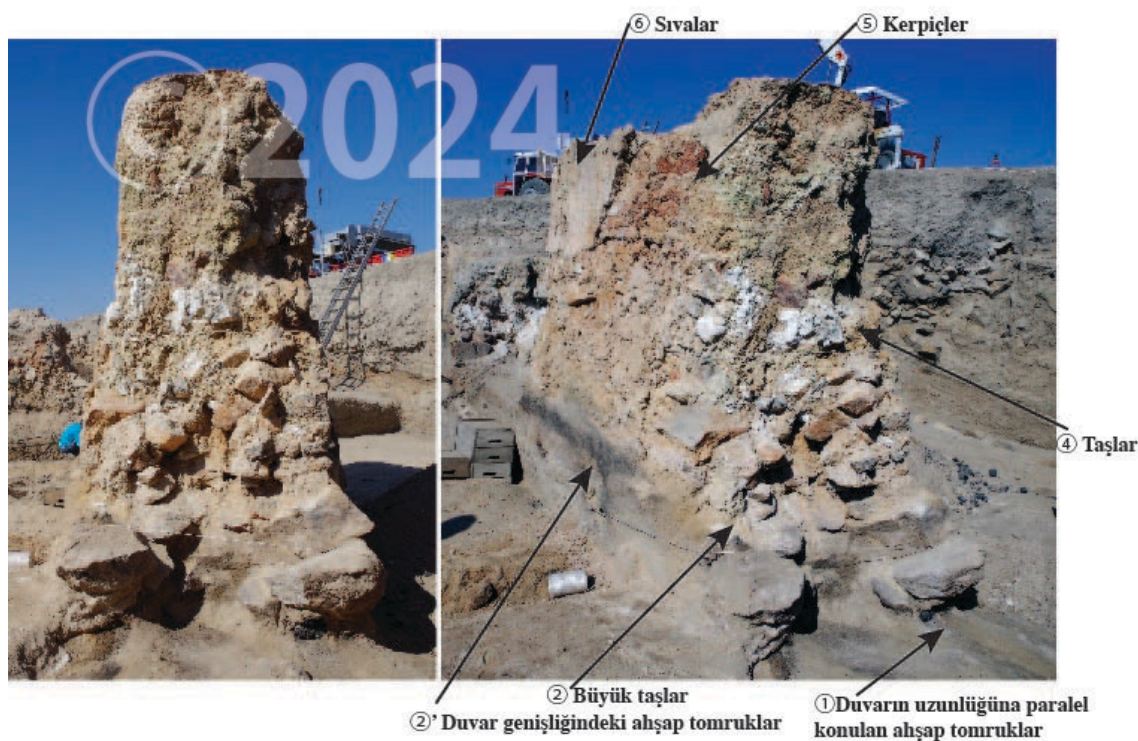


Fig. 3 W121, E9/g1, III-1

- ① 最下段の基礎部には、直径約 20-25cm、長さ約 2m の丸太が 3 本、壁の長さ方向に平行に敷かれ、間には土が詰められていました。
- ② 丸太の上には、壁の幅一杯に約 1m の長さで大型の石が詰められたブロックが約 1.5m 間隔で繰り返され その大型石のブロックとブロックの間の約 1.5m の空間には、壁の幅の長さの丸太が枕木のような形で並べられていました

- ③ 場所によっては、①の上に比較的小さな石を敷き、その上に②'と同様に並べられた丸太が観察されました
- ④ 上記の丸太と石で築かれた基礎の上に、人頭大の石が約 2m の高さで積み上げられています
- ⑤ その上に約 30cm x 50cm x 10cm の大きさの日乾煉瓦が、積み上げられました。
- ⑥ 壁の前面の化粧土は、第 1 床面より下のすなわち古い第 2 床面に伴う部分では厚く（約 20cm）、第 1 床面に伴う部分では比較的薄い（約 5 cm）ものでした。どちらも最表面は石灰プラスターが塗布されていました。



Fig. 4 2024 年度に取り外しを行なった遺構群

R21 の取り外し：

王宮址の中心にある R8 の南北にはこれに平行して細長い廊下状の空間 R21 と R27 が設けられています。これらのうち北側の R21 の取り外しを行いました。床面を外し、R21 と R102-R46 の間の壁 W58、さらに R21 と R8 の間の壁 W19 を取り外しました。約 7-8 cm の厚さの第 1 の床面の下に、もう一枚の床面が検出されました。約 2cm の厚さのこの第 2 の床面の下に検出された黄灰色の土層は、W58 の縁辺で切られていることが確認されました。すなわち、W58 を建設する際に、この黄灰色の土層を切り込んでわずかに溝を掘り込み、そこに W58 の基礎を築いたこととなります。

R102-R46 と R21 の間の壁 W58 は、この王宮址を建設する前に、基礎とすべく敷詰められたと考えられる黄灰色の土層を、壁の幅に合わせて一部掘り込み、壁に平行に並べられた丸太と石による基礎の上に、1 m 余り積み上げられた石積みがあり、その上に日乾煉瓦が積み上げられていました。この部分では基礎の丸太の残存状態は良くありませんでしたが、W58 と直行する W20 の断面で W19 へ延びる炭化した丸太が観察されています。W58 も W121 とほぼ同様の構造です。

R21 と R8 の間の壁 W19 と R8 の他の三つの壁 W17、E20、W80 は、この大遺構の他の壁よりも厚く築かれていますが、その構造は W58 や W121 とほぼ同様です。しかし、壁を築いている日乾煉瓦部分が少なく、石が 2 m 近くのより高い位置まで使用され、さらにその石が比較的粗雑に詰め込まれていることから、これらの壁が急遽、修繕、再建された可能性が考えられます。



Fig. 5 取り外し作業中の遺構 R21(W58), R149, R104, R105, III-1

R149、R104、R105 の取り外し

R21 と R102 の東側に発掘された小部屋 R149、R104、R105 は W278、W296 を共有し、R21 と W19、W281、W283 を共有しています。

R149 はグリッドの東端辺に近くの狭い場所で出土しており、遺構内部および床面の調査は、W278、W296 の上部を取り外した後に行うことができました。約 2-3 cm の厚さの床面は火を受け、炭化していましたが、この床面の下には第 2 の床面は検出されませんでした。この床面を取り外した後、W278、W296 の基礎部の取り外しを行いました。これらの壁もその工法は、W121 はじめ他の取り外しを行なった壁とほぼ同様でした。

R104、R105 は、鉄器時代の建物によりひどく損傷を受けており、その床面も十分に保存されておらず、すでに床面下の埋土が露出している状態でした。このため、R149 と共有する壁 W278、W296、R21 と共有する壁 W281 と同時に、R104 と R105 間の W282、R105 の南壁 W293 も取り外しました。

W289、W292、W294(Ins32、Ins33)

R21 から南方向に延びる Ins32 と Ins33 は、上部構造を鉄器時代の建物により破壊されてしまっていたが、石積みの基礎 W289、W292、W294 の間に黄色粘土を詰めた遺構が Ins32、Ins33 として確認されています。W289 には R21 と Ins32 間の敷居と見られる木材が敷かれていました。これらの基礎の石列が W19、W281、W282、W295 と繋がっていることを確認し、これらを取り外しました。

E9/e1 における R39-R8 の一部取り外し

E9/e1 グリッドに残存する R39 の床面、北壁 W19 の取り外しを行いました。床面に先立ち、W19 の南面に付加されていたベンチも取り外しました。また、R8 と R39 の間の壁 W80 の E9/e1 グリッド内の部分の取り外しも行いました。W19 と W80 の交差部分の基礎部には緻密に敷き詰められ丸太が検出されました。



Fig. 6 W19 と W80 挟んで R8 を囲む R21 と R39



Fig. 7 W19 と W80 の交差部分の基礎部に敷かれていた丸太材

2.2. 第1—第2火災層間の建築遺構(第2、第3建築層)とピット群

前年度までに確認されている前期青銅器時代の二つの火災層の間には、少なくとも二つの火災を受けていない建築層とピット群層があることが、より明らかになりました。

2.2.1. 第2建築層(III-2):E9/e1 グリッドで、R21の直下に検出された R165 は、最下段の石列のみが残る W433 と W434 が発掘され、北壁と西壁は残存していませんでした。しかし、その出土状況、建築スタイルから見て、2023年度に E9/f1

グリッドの北東隅で検出された R161、2022 年度に E9/d1 グリッドで出土した W369 とともに、第 1 建築層の王宮址直下かつ王宮址によって概ね損傷された建築群のうち、辛うじて残存したものであると見られます。



Fig. 8 R165, E9/e1, III-2

2.2.2. 第 3 建築層(III-3) : W121 の南側 R21 を取り外したのちの黄灰色の埋土の下から出土した矩形の遺構 R166 は、西と南の壁は壁のための掘込まれた溝が残るのみで壁そのものは確認されていませんが、東壁 W438 と北壁 W440 は基礎部の大型石列が残っており、前年度に E8/f10 グリッドで出土している東壁沿いに三つの炉が並んだ R152 とその隣の R153 に繋がる遺構と考えられます。

E9/g1 グリッドで検出された溝状の堀込みは、R152 の北東へ延びていた 2 本の壁に繋がり、これも何らかの理由で礎石が抜き取られた状態の壁のために掘り込まれた溝であると考えられます。この R152 の北辺の溝はさらに北西方向へも伸びており、R152、R153、R166 を含む建物がかかなり大きな建造物であったことが推察されます。R166 の北西部で検出された周囲が小石で囲まれた炉 H53 は、R152 の H46、H48、H50 と同様の形態と言えます。また、R166 の中央近くでは中程がやや窪んだ小型の円形の炉 H54 も検出されています。



Fig. 9 R166, E8/f10, III-3

2.2.3. E8/f10、E9/e1 で III-1 建築層の王宮址に属する壁とともに部屋を取り外すと、多数のピットが確認されました。これらの多く (P452 P453 P455 P457 P460 P427 P462 P463 P466 P467)は、R16 5 (III-2)よりも古く、R166(III-3)よりも新しいと見られます。ただし、P462 と P464 は R166(III-3)よりも古いと考えられます。



Fig. 10 第1-第2火災層間に出土したピット群 E8/f10, E9/e1

2.3. 第2火災層に属する建築遺構 (第4建築層 III-4)

2022-2024 年度の発掘調査で前期青銅器時代の第2の火災層には、少なくとも2度の増改築を経て3期に区分される遺構群が確認されました。

2.3.1. III-4-1: R141、W377、W441、W442、W443は、後述のIII-4-2に付加されたものです。2022年度にE9/d1グリッドで確認されたR141の延長部がE9/e1グリッドで発掘されました。W441とW443がW442と交わって作る空間は、R141の北側部分と考えられます。R141の東端部では、E9/d1グリッドであったと同様に、多数の日乾煉瓦が重なり崩れ落ちた状態で検出されています。W442の中程には出入口とおぼしき間隙があり、壁の南側には階段と思われる化粧土が施されたステップが残されていました。また、W441とW442による内側隅には日乾煉瓦による壇状の構造物が検出されています。



Fig. 11 R141, E9/e1- E9/d1, III-4-1

2.3.2. R164 (III-4-2-1): R164 は W429 の構造から観察して、本来 III-5 建築層に位置する W427 の上部(III-4-2-2 の時期に R157 の西壁として後補)に沿って R157 の西側に増築されたものの様です。部屋内部には、狭い通路を挟んで設けられた二つのプラットフォームに口縁部まで埋められた大型の甕が 17 点確認されました。



Fig. 12 R157 に隣接する R164, E8/g1p0, E9/g1, III-4-2-1



Fig. 13 R164, E8/g10, E9/g1, III-4-2-1



Fig. 14 III-4 建築層(第2火災層)の遺構群

2.3.3. R140、R144、R147、R154、R155、R155、R156、R157、R158、R159

(III-4-2-2): 後述の III-5 建築層に属する壁の直上に建設されています。R154 および R157 の石灰分の多い白灰色の床面は 2023 年度に E9/f1 グリッドで一部出土していましたが、その北への延長部分を今年度 E9/g1 グリッドで確認されました。R157 内部では、保存状態は良くありませんが、口縁部より上部のみが床面上に出た状態で埋め込まれた大型の甕が 3 点検出されています。

R155 では、床面は損失しており確認できませんでしたが、2 点の尖底の大甕が横倒しの状態で発見され、このレベルがほぼ床面であったと推定されます。

R156 の東端に検出された 3 段の階段は、おそらくさらに西端に向かって昇っていたものと推察されますが、中央から西は損失しており、確かではありません。ただ、東端のステップは、R156 と R158 の東南部で一部保存されていた床面に繋がっており、建物への出入り口であった可能性が考えられます。



Fig. 15 R156 東端に出土した階段 E9/e1, III-4-2-2

2.4. 第3火災層に属する遺構群(III-5 建築層)

R154とR157の直下およびW409の直下に確認された壁W414、W426、W427、W428、W439は、未だ発掘は進んではいませんが、R162とR163を構成するものです。上述のIII-4-2建築層では、古い建物であるIII-5建築層のR163の西壁W427の上部が、W428の上方に築かれたW409とともにR157として再利用されていたものと考えられます。E9/g1グリッドの北東隅で、おそらく紀元前2千年紀に垂直に深く削られ破壊されてはいますが、W427、W418と交差するR163の北壁W439が出土し始めました。この破損部分での観察によれば、R163の西

壁 W427 は北壁 W439 とともにより深く続いている一方、R164 の東壁である W429 は、R157 の東壁である W427 の上方部と平行して W439 の上端レベルで終わっていました。また、R164 で床に埋込まれた大甕のうち R164 の北端でその断面が観察できるものの器底は、いずれも W429 の基礎の底部から下には確認されませんでした。

III-5 建築層の発掘は未だ、グリッドの北東端の破損部での部分的なものではなく、詳細は明らかではありませんが、2025 年度以降の調査で詳らかにすることができると考えます。



Fig. 16 R162, R163, E9/g1, III-5

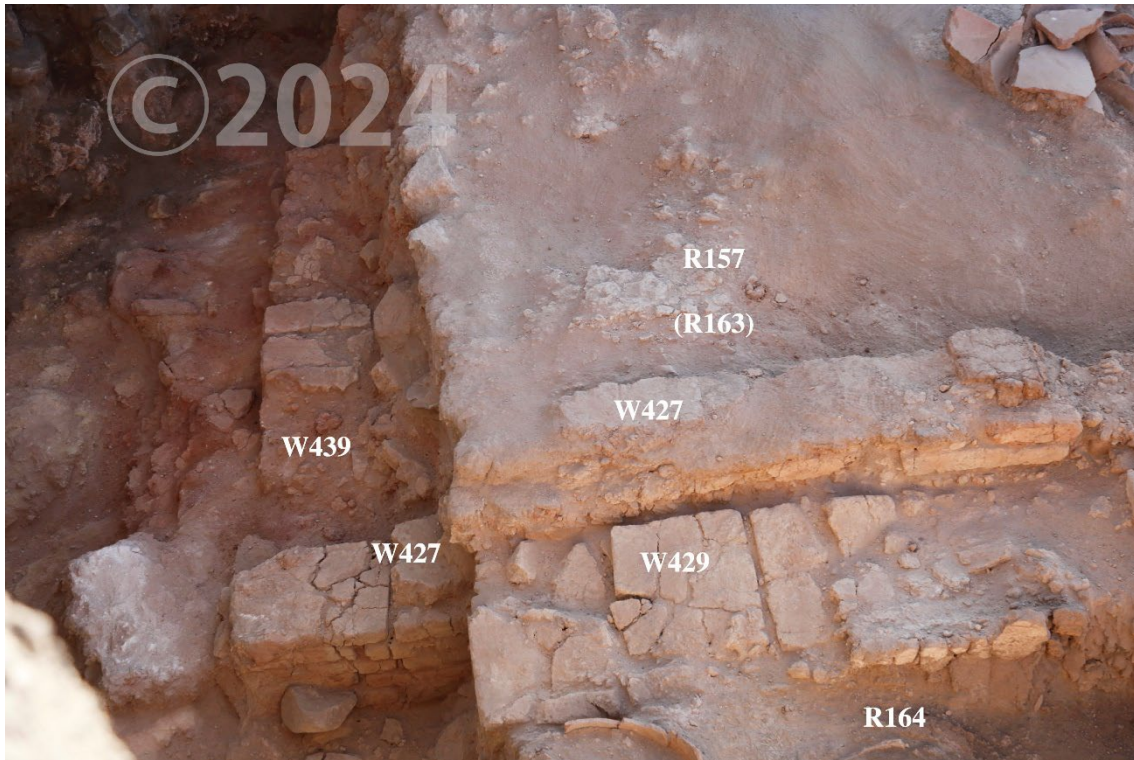


Fig. 17 R163 の西壁 W427 と北壁 W439, E9/g1, III-5

3. 土器と小遺物

3.1. III- 1 建築層の王宮址に属する遺構の一部を取り外す際に出土した遺物としては、印影付封泥、刻文付小紡錘車が見られます。土器はろくろ製と手捏ねのものがともに出土しています。



Fig. 18 印影付封泥 240004



Fig. 19 印影付封泥 240006



Fig. 20 刻文付紡錘車 240011 焼成粘土 Fig. 21 片手付杯 240013 手捏ね

3.2. 第1-第2火災層間(III-2, III-3)で出土した遺物には、3点の石製印章の他に、金属製品とした、青銅製のピンやリング、鉛製のリングに混じって、鉛製の円盤形イドルが発見されました。このイドルは、キュルテペのアラバスター製の円盤形イドルに類似した形状ですが、その材質の違いが注目されます。土器の中には典型的なアリシャル III 式土器が見出されました。



Fig. 22 足形印章 240001 石

Fig. 23 スタンプ形印章 240026 石



Fig. 24 スタンプ形印章 240077 石 Fig. 25 円盤形イドル 240032 鉛



Fig. 26 アスコスもしくは動物形容器 240055、アリシャル III 式土器

3.3. 第2の火災層 (III-4) では、床に埋め込まれた状態で多数確認されている大甕の発掘はまだ行われていませんが、その周辺でいくつかの片手付杯や尖底杯のような小型の土器や小型の紡錘車が出土しています。



Fig. 27 片手付杯 240045 赤色磨研 ろくろ製



Fig. 28 尖底杯 240067 ろくろ製



Fig. 29 刻文付紡錘車 240025 焼成粘土